



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討
Author(s)	青木, 聡子; 岩立, 京子
Citation	東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学, 56: 79-85
Issue Date	2005-03-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/2069
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

幼児を持つ父親の育児参加を促す要因；父母比較による検討*

青木 聡子・岩立 京子

幼児教育学**

(2004年10月29日受理)

1. 問題と目的

子どもの成長・発達には養育を受けることが不可欠であり、多くの場合、その担い手は親である。幼い子どもにとって、その生活基盤を支える家族の存在は極めて重要で、特に、養育にあたる成人との関係は、子どもの年齢が低いほど、発達への影響が大きい。現在、わが国は、少産少死の少子化や長寿・高齢化、産業構造の変化による労働力の女性化をはじめとする、かつてない急激な社会変動の只中にある。戦後の高度経済成長期に一般化した性別役割分業を支えてきた心理学的性差はボーダーレス化・アンドロジニー化傾向にあり、男女ともに家庭、社会・職業の両方の役割を担うことが必須となりつつある（例えば、柏木，2003）。そして、父親の育児参加が、子どもの発達を促進すること（例えば、中野，1992a；1992b）や、母親の育児負担感や否定的感情の軽減につながる（例えば、柏木・若松，1994）、父親自身の発達や家族内での在り方の模索といった理由から、注目されている。

ところが、男性の家事・育児かかわりを当然とする認識が男女ともに拡大している一方で、実際の家事・育児の負担は共働きの家庭においても女性に集中している（内閣府，2003）。職業役割の有無だけでは説明しきれないこのような男女間の差は、一体、どのようにして生まれるのだろうか。以下では、幼児を持つ有職の親の生活のなかで大きな割合を占める仕事と子育て、そしてそれらの価値付けを左右すると思われる性別役割観についてみていくこととする。

性別役割観を捉える性別役割のアイデンティティについては、これまで、多くの研究で、父親の育児参加を

規定する要因として重要な位置を占めることが指摘されてきた（鹿嶋，1993；柏木・若松，1994；総務庁，1996）。これは、従来、パーソナリティ、態度、能力などにわたって見出されてきた性差、心理学的性差の多くが、性別役割分業を前提とする社会の中で、男性と女性が異なる教育や役割を持ってきたことの結果である（柏木・若松，1994）ことに起因する。そして、性別役割のアイデンティティを育児参加の規定因とする実証的な研究はほとんどみられないことから、今一度、調査を行う必要があるだろう。だが、最も革新的な性別役割のアイデンティティを持つとされる有職の母親（柏木・若松，1994）でさえ、有職の父親よりも家事・育児を担当している割合が高い（内閣府，2003）という現状からは、他の要因によって革新的な性別役割のアイデンティティに沿った行動が妨げられている可能性も考えられる。次に、親役割についてみていくこととする。

妻からの夫の育児に対する厳しい評価（Belsky & Kelly，1994）、モデルとなる父親像の欠如や父親の中に親役割と職業役割との間で生じる葛藤（福丸・無藤・飯長，1999；土谷，2000）など、現代の父親が親役割について肯定感を抱くことは容易ではないことを推察させる報告は多い。しかし、この親役割肯定感と関係すると思われる、子育ての意味に対する考え方を扱った、総務庁青少年対策本部（1996）の調査からは、子育てに関する信念が実際の行動に反映しているという知見が得られている。これらを総合して考えると、親役割について肯定的な価値・評価を見出すことが、育児参加の促進につながっていると考えられる。

また、忘れてはならないのが、生活の中で大きな割合を占める仕事からの子育てへの影響についての検討

* Determinants of paternal involvement in childcare; the analysis of differences between mother's and father's belief / Satoko AOKI, Kyoko IWATATE

** 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

である。これまで、育児参加の規定因として職場環境を扱った研究では、労働時間や育児休暇制度の充実等、物理的なものがとりあげられてきた。しかし、男性が育児休業等を利用し、育児に積極的に取り組むには、本人の意思は勿論、社会や職場の理解と協力も必要なのではないだろうか。「男女共同参画社会に関する世論調査」(内閣府, 2002)によれば、男性が育児休業をとったほうがよいと考えている人は全体の69%、特に20代では78%にもものぼり、男性が育児休業を取得することを肯定的に考えている人が多いことがわかる。しかし、同調査では、男性が育児休業を取ることについて、社会や企業の支援が十分ではないと考えている人が80%にも及んでいるのである。よって、職場環境としては、「職場の性別役割分業意識」や、「上司の理解」、「育児休暇制度の充実」などの職場に対する精神的・物理的な「拘束感」を問うことが重要であると思われる。

以上のことから、父親の育児参加を促すには、単に、父親の意識改革を望むだけでなく、父親をとりまく職場などの社会状況を含めて育児参加を捉える必要があるといえよう。そこで、本研究は、父母双方を対象に育児参加の規定因を同時に検討した研究が少ないことを踏まえ、幼児を持つ父親と母親が、性別役割分業や職場環境、親役割をどのように捉えているのか、父親と母親という立場の違いによる比較や夫婦単位の分析を行った上で、それらと実際の親行動である育児参加との関連について検討することを目的とする。これまで、育児の規定因を取り扱った研究の対象はほとんどが父親であった。しかし、男女雇用機会均等法が制定されて20年目を迎える現在、雇用者総数に占める女性の割合はここ30年上昇傾向にあり(平成15年は40.8%)、「妊娠又は出産による退職者の割合」は大きく低下している(昭和41年には52.8%だったのが、平成9年には既に19.0%になっている)(以上、厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 2004)。このことから、職業役割と家庭役割とを両立させるといことが女性にとっても重要な課題であることがうかがえ、母親についても育児の規定因を改めて問い直すことが必要であると考えられる。また、父親と母親の育児について共通の規定因を比較することで、職業役割の有無だけでは説明しきれなかった心理学的性差についても検討することが可能となるのである。

2. 方法

2. 1 調査時期

2002年10月に、幼児を持つ父母5組を対象に予備的調査を行い、意味の明確さや回答の容易さなどの観点から質問項目を吟味した。その結果をもとに質問紙の修正を行い、本調査は同年11月に実施した。

2. 2 手続き

東京都内の保育園5園に通う4、5歳児学年の幼児をもつ父母に、園を通じて調査用紙を配布し、家庭で記入後、封をして園に提出してもらったものを回収した。

2. 3 調査対象

配布数466通のうち回収されたのは、父親77通、母親86通の計163通(回収率35.0%)で、欠損値があるものを除いた父親68通、母親85通を分析の対象とした(有効回答率32.8%)。(そのうち夫婦ともに回答を得られたものは66組であった。)対象児の平均年齢は4.5歳(4~5歳)で、このうち男児は44人(50.6%)、女児は43人(49.4%)、また、第1子は51人(58.1%)、第2子は24人(27.9%)で、第3子以降が12人(14.0%)であった。子どもの人数は2人が52.8%と最も多く、続く1人は26.4%で、全体の8割を超える世帯が核家族であった。尚、父母ともに30代が過半数を占めていた。

2. 4 調査内容

育児参加(6項目):「配偶者と自分の育児分担の割合(全体を10とした整数比で表す)」を問う1項目と「世話行動」の頻度を問う5項目を扱うことにした。「世話行動」の評定尺度は、「いつもしている」から「ほとんどしていない」までの4段階評定である。

性役割のアイデンティティ(40項目):性役割に対する態度を平等主義的—伝統主義的という観点からとらえることのできる、鈴木(1991)のthe Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes (SESRA)日本語版第2版を用いた。評定尺度は、「まったくそのとおりだと思う」から「ぜんぜんそう思わない」までの5段階評定である。

親役割肯定感(12項目):親役割の積極的・肯定的な意識と消極的・否定的な意識を分離して測定することのできる、母性意識尺度(母親役割の受容に対する意識)(大日向, 1988)を、母親についてはそのまま、父親についてはこれと対応するよう改変して用いた。

評定尺度は、「そのとおりである」から「違う」までの4段階評定である。

職場環境（職場拘束感）（10項目）：職場での人間関係や雰囲気などの精神的な拘束感、育児休暇制度の充実や労働時間など物理的な拘束感を問う項目を独自に作成した。評定尺度は、「そのとおりである」から「違う」までの4段階評定である。

その他属性：家族構成、回答者の年齢、子ども的人数、子どもの性別について問う。

3. 結果と考察

3. 1 尺度の分析

性役割のアイデンティティ、親役割肯定感についてそれぞれ主因子法、エカマックス回転による因子分析を行い、性役割のアイデンティティについては4次元性を考慮して4因子を、親役割肯定感については2次元性を考慮して2因子を抽出した。さらに、当該の因子負荷量が|.40|以上で他の因子負荷量が|.40|未満となるような項目を抽出して、最終的に全ての因子に項目が負荷するようにしたものが、表1、表2である。性役割のアイデンティティの第1因子は、女性であるという理由だけで仕事上のチャンスを奪ってはい

表1 性役割のアイデンティティの因子分析結果（エカマックス回転）

No	質問項目	機会の平等	伝統的性役割	平等主義的性役割	女性の社会進出	M	SD
34	将来は、女性が男性と完全に平等の仕事内容、賃金、昇進を得られるようになることが望ましい。	0.731	0.141	0.341	0.096	4.2	0.87
32	女性も訓練を受ければ、責任のある仕事や重要事項の決定をまかせられる。	0.686	0.048	0.226	0.147	4.3	0.78
33	女性であるという理由だけで仕事上のチャンスを奪ってはいけない。	0.675	0.131	0.239	0.106	4.6	0.69
21	子どもには、男女の区別なく教育の機会を平等に与えるべきだ。	0.670	0.125	0.217	-0.001	4.6	0.75
22	中学、高校では男子も家庭科を学ぶべきである。	0.669	0.186	0.372	0.040	4.2	0.99
25	従来男性の仕事と考えられてきた職業（エンジニア、タクシーやバスの運転手、パイロット、シェフ、外交官、数学者など）に今後は女性もどんどん進出すべきである。	0.527	-0.056	0.102	0.163	4.0	0.97
37	女性が社会に出て働けば、社会の進歩や発展にとってもプラスになることが多い。	0.487	0.078	0.156	0.229	4.0	0.77
14	男女の能力差より、個人の能力差の方が大きい。	0.448	-0.003	-0.145	0.079	4.0	0.99
9	女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。	0.056	0.708	0.140	0.060	4.1	0.95
20	娘は将来専業主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	-0.012	0.706	0.008	0.112	4.4	0.77
11	夫婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない。	0.098	0.594	-0.055	0.254	3.7	0.95
4	結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	0.041	0.553	0.311	0.041	3.9	1.13
26	女性は結婚して子どもが生まれたら仕事をやめ、末子が小学校に入学する所に再就職するのが望ましい。	0.226	0.543	0.085	0.275	3.9	0.97
18	男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。	-0.005	0.516	0.047	-0.010	3.1	1.17
23	女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい。	0.193	0.500	0.050	0.347	3.7	1.04
31	家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい。	0.087	0.496	-0.017	0.265	3.5	0.98
10	夫婦が共働きの場合、家事を平等に分担すべきである。	0.040	-0.026	0.918	0.064	3.6	1.00
12	夫婦が共働きの場合、育児を平等に分担すべきである。	0.144	0.019	0.784	0.103	3.6	0.96
1	家事は男女の共同作業であるべきである。	0.386	0.226	0.483	0.193	4.0	0.99
39	家庭や社会で、男女平等の権利と義務をもっと強調すべきだ。	0.275	0.135	0.434	0.274	3.4	1.01
29	経済的に必要性がなくても、女性も働いたほうがよい。	0.152	0.175	0.159	0.680	3.4	0.92
27	女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。	0.161	0.017	0.136	0.609	3.5	0.83
28	経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。	-0.084	0.257	0.137	0.605	3.6	1.04
40	女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきだ。	0.266	-0.222	0.319	0.518	3.8	0.81
7	専業主婦として、趣味、スポーツ、レジャーなどを楽しむ生活のほうが、共働きをする生活より幸せである。	0.019	0.215	-0.046	0.440	3.6	0.95
固有値		3.557	3.077	2.645	2.267		
累積因子寄与率(%)		14.230	26.539	37.119	46.185		
α係数		0.842	0.813	0.768	0.727		

表2 親役割肯定感因子分析結果 (エカマックス回転)

No.	質問項目	積極的・肯定的な意識	消極的・否定的な意識	M	SD
7	父親(母親)であることに生きがいを感じている。	0.823	0.156	2.0	0.86
11	父親(母親)であることに充実感を感じる。	0.752	0.166	2.0	0.79
1	父親(母親)であることが好きである。	0.744	0.242	1.6	0.72
9	父親(母親)になったことで気持ちが安定して落ち着いた。	0.670	0.109	2.4	0.82
3	父親(母親)になったことで人間的に成長できた。	0.607	-0.133	1.6	0.67
5	父親(母親)としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う。	0.566	-0.051	3.0	0.70
8	子どもを育てることが負担に感じられる。	0.166	0.724	1.8	0.84
6	育児にたずさわっている間に、世の中からとり残されていくように思う。	0.060	0.637	1.8	0.86
4	自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる。	-0.119	0.575	1.8	0.74
2	父親(母親)であるために自分の行動がかなり制限されている。	-0.108	0.560	2.8	0.92
10	自分は父親(母親)として不適格なのではないだろうか。	0.223	0.505	2.1	0.80
12	子どもを作らないほうが良かった。	0.256	0.499	1.2	0.54
固有値		3.126	2.221		
累積因子寄与率(%)		25.881	44.388		
α 係数		0.851	0.748		

けない、などの項目からなっているので「機会の平等」の因子とした。第2因子は、女性のいるべき場所は家庭であり、男性のいるべき場所は職場である、などの項目からなっているので「伝統的性役割」の因子、第3因子は、家事は男女の共同作業であるべきである、などの項目からなっているので「平等主義的性役割」の因子、第4因子は、経済的に必要がなくても、女性も働いたほうがよい、などの項目からなっているので「女性の社会進出」とした。各因子をもとに作成した尺度得点の信頼性係数(Cronbachの α 係数)は、それぞれ、第1因子が.84、第2因子が.81、第3因子が.77、第4因子が.73であった。親役割肯定感の第1因子は、父親(母親)であることに生きがいを感じている、などの項目からなっているので「積極的・肯定的な意識」の因子、第2因子は、子どもを育てることが負担に感じられる、などの項目からなっているので「消極的・否定的な意識」の因子とした。各因子をもとに作成した尺度得点の信頼性係数(Cronbachの α 係数)は、それぞれ、第1因子が.85、第2因子が.75であった。以上の結果を踏まえて各因子について尺度得点を作成した。性役割のアイデンティティについては、回答の数値(逆転項目は6-数値)を得点とみなして|.40|以上の項目を選択し、合計点を算出した。この得点が高いほど性役割について平等主義的態度を、低いものほど伝統主義的態度を有することを意味する。同様に、親役割肯定感についても、回答の数値(逆転項目は5-数値)を得点とみなして|.40|以上の項目を選択し、合計点を算出した。この得点が高いほど親役割について肯定的に捉えていることを意味する。

職場環境については、福丸ら(1999)や内閣府

(2002)を参考に項目を独自に作成し、予め回答に割り振っておいた得点を合計した。この得点が高いほど職場環境が厳しく、職場に拘束されていることを示す。尺度得点の信頼性係数(Cronbachの α 係数)は.64であった。

育児参加については、柏木ら(1994)や福丸ら(1999)、内閣府(2002)を参考に項目を独自に作成し、予め回答に割り振っておいた得点を合計した。この得点が高いほど育児参加が多いことを意味する。

3. 2 性役割のアイデンティティ、親役割肯定感、職場環境(職場拘束感)の比較

3. 2. 1 各属性での比較

調査対象者の属性と各因子との間に関係があるのかを検討した結果、親の年齢別の分析では、30歳以下と、41歳以上の間に有意な差がある傾向がみられ($F(3,149)=2.51, p<.10$)、41歳以上の親の方が、親役割において「消極的・否定的な意識」が強いことが示された($MSE=9.74, p<.05$)。しかし、著しい男女比の偏りがみられたことから、この有意差は、後に述べる父親と母親との差の影響を受けた結果であると考えられる。

3. 2. 2 父母比較

まず、性役割のアイデンティティでは、父母間で4因子中3因子に有意差がみられた。具体的には、「伝統的性役割」($t(151)=-3.31, p<.01$)、「平等主義的性役割」($t(151)=-2.30, p<.05$)、「女性の社会進出」($t(151)=-2.08, p<.05$)で、いずれも母親の方が尺度得点が高く、女性の方がより革新的・平等主義的な性役割観を持っているという先行研究(柏木・若松,

1994；総務庁，1996）と同様の結果が得られた。また、唯一父母間に有意な差がみられなかった「機会の平等」は、他の3因子が実際の家庭生活と結びつくような質問項目が多いのに対し、社会一般としての男女の在り方を想定させるような質問項目が多かった（表1）。家族は、常に共通の利害を持つものではなく、成員間で利害はしばしば対立・衝突する（柏木・永久，1999）。とりわけ、育児・家事などの世話役割の授受関係にある妻と夫の間には、利害対立やずれは著しい（柏木・若松，1994；数井，1996）。そして、家庭ではケアを受ける立場にある男性は、相対的にみて現状に不満は少ないであろう（柏木，2001）。つまり、「伝統的性役割」、「平等主義的性役割」、「女性の社会進出」については、これまで通り女性に家庭の役割を担って欲しい、と願う父親においては、より伝統的な性役割の価値指向がみられ、このことが、革新的な価値指向を持つ母親との得点差を生み出したのではないかと考えられる。逆に、「機会の平等」は、職場や教育上の内容が主である為、今の父親の生活に直接的な影響がないことが、父親の回答の平均値を引き上げ、結果、母親との得点差を縮めたのではないだろうか。

次に、親役割肯定感では、2因子中1因子、「消極的・否定的な意識」で有意差がみられ ($t(152) = -7.22, p < .01$)、父親の方が自分自身の親役割について否定的に捉える傾向が強いという結果が得られた。このことは、現代の父親が、親役割について肯定感を抱くことは容易ではない、とする先行研究（福丸・無藤・飯長，1999；土谷，2000）と一致する。また、父親と母親とでは、母親の方が育児参加得点は有意に高く、加藤（1992）の研究と同様、親役割の肯定という自己についての意識が、子とのかかわりという行動を支える、という結果が得られた。では、何故父親の方が、親役割についての消極的・否定的な意識が強いのだろうか。これについては、まず、妻が育児・家事の役割をすでに担っているという現状の中では、父親までそのような役割を取る必要はないのではないかと、という従来の古典的な家族関係を反映した心理がある（総務庁，1996）ことが考えられる。また、例えば育児をしたとしても、妻から感謝の言葉が聞かれなかったり、妻が夫の育児に対して批判的であると、父親は、自らの親役割を肯定的に捉えることが難しくなる（Belsky, J. & Kelly, J., 1995）、という性役割のアイデンティティの男女間のギャップが引き起こす問題もある。

「職場拘束感」においては、母親の方が、より職場に拘束されていると捉えていることが示された (t

(149) = -2.24, $p < .05$)。性役割のアイデンティティの父母比較において、父親の方が、より伝統的な性役割観をもっていることが示されたことから、父親は、依然として男性の主要な役割を職業役割とする意識が強いことがうかがえ、仕事に拘束されていたとしても、むしろそれを当然と考えているのではないかと考えられる。

3. 3 育児参加の親子の性別による比較

親と子の性別による組み合わせによりグループ分けし、育児参加得点に違いがあるかを分析した結果、女兒よりも男児の母親の方が育児参加をしているという有意な傾向が示された ($t(85) = 1.882, p < .10$)。柏木（1998）が、男児は女兒よりも親にとって心理的負担が大きいことを指摘していることかを加味すると、男児の母親の育児参加得点が高かったのは、男児の方が、主たる養育者である母親の世話を必要とする機会が多い、という必然性に基づくものであることが推察される。

3. 4 夫婦間の相関

各因子において、夫婦間での相関がみられるかを検討した結果、いくつかの因子で有意な相関がみられたが、いずれもあまり高いとはいえない程度であった。しかしながら、性役割のアイデンティティの「機会の平等」($r = .382, p < .01$)と「女性の社会進出」($r = .317, p < .01$)にみられた、夫婦間での弱い正の相関は、柏木・若松（1994）の知見と同様の傾向であった。つまり、教育や仕事の機会が男女平等に与えられること、女性も仕事をもつことを望ましいとする性役割についての夫婦の意識は、共働きの夫婦という現実の生活様式に一致・対応するものであると考えられる。

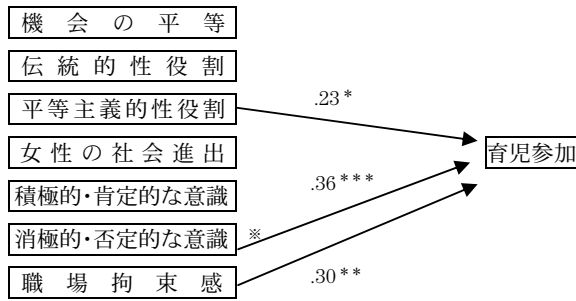
3. 5 父親と母親の育児参加

3. 5. 1 父親の育児参加と母親の育児参加との関係

分析の結果、父親と母親の育児参加には中程度の負の相関があることが示され、数井・中野・土谷・加藤・綿引（1996）の研究同様、相補的な関係がみられた。但し、父親と母親とでは、母親の方がより多く育児に関わっていることから、相補的な関係とはいえ、その分担割合には偏りがあることに注意したい。

3. 5. 2 育児参加を規定する要因

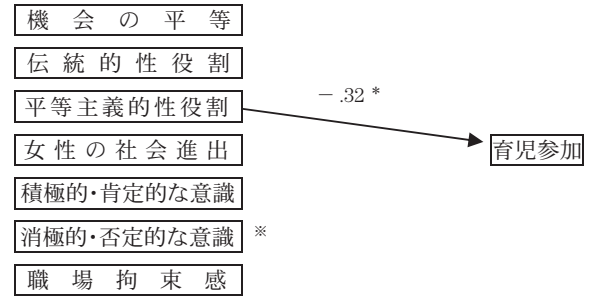
父親は、「職場拘束感」($\beta = .36, p < .001$)、親役割肯定感の「消極的・否定的な意識」($\beta = .30, p < .01$)、



※逆転項目

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

図1 父親の育児参加を基準変数とした重回帰分析結果



※逆転項目

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

図2 母親の育児参加を基準変数とした重回帰分析結果

性役割のアイデンティティの「平等主義的性役割」($\beta = .23, p < .05$), 母親は, 性役割のアイデンティティの「平等主義的性役割」($\beta = .32, p < .01$)に, 実際の育児参加との有意な関連がみられた ($R^2 = 0.29, p < .001 / R^2 = 0.10, p < .01$) (図1, 図2)。

まず, 「職場拘束感」については, 主たる養育者である母親で, 父親よりも強い拘束感がみられ, 父親の重回帰式では, 職場拘束感と育児参加得点とは正比例の関係にあった。内閣府 (2002) の調査では, 男性が育児休業を取ることについて, 社会や企業の支援が充分とは思わない人が8割を占めていることが報告されているが, 女性の場合も, 「たとえ母親であっても, 非正規雇用でパートタイムの勤務であっても, 職場では労働力として1人前の戦力であることが期待される。」(小泉, 1998) のが実情である。よって, 職場に拘束されている, という意識は, 実際に親役割を優先させようとするときに生じるものであると考えられる。

続く, 親役割肯定感の「消極的・否定的な意識」は, 先行研究 (加藤, 1992) 同様, 親役割の肯定という自己についての意識が, 子とのかかわりという行動を支える, という知見が得られた。

また, 性役割のアイデンティティの「平等主義的性役割」は, 質問項目そのものが, 家事・育児を女性と共同で行った方がよいと考えるか否かを問う内容である為, 父母ともに, 男性の育児参加に対する言行一致の態度が示されたといえる。

以上のことから, 男性の主要な役割を職業役割とする意識が強い, 伝統的な性役割観をもつ父親は, 親役割よりも職業役割を優先させる為育児参加得点は低く, 更に, それを当然と考えている為, 職場拘束感が弱いと考えられる。逆に, 親役割を肯定的に捉えている父親は, 職場への拘束感を感じながらも, 親役割を果たすことを重視する為, 育児参加得点が高く, また, そのことが, 親役割肯定感を高めることに繋が

るのではないだろうか。

父親と母親の育児参加に関連する要因の比較から, 父親の育児参加には, 性役割のアイデンティティの「平等主義的性役割」という, 母親と共通する因子に加え, 親役割肯定感 (「消極的・否定的な意識」), 「職場拘束感」が関連することが示された。この理由としては, 父親においては, 自身の親役割に対する肯定的な価値付け・評価がしにくい故に, 親役割肯定感に育児参加との関連がみられ, 職場環境については, 母親が主たる育児の担い手であるという現状では, 積極的に育児に関わることで初めて, 職業役割と親役割の間に葛藤が生まれ, 職場に拘束されている, と感じるようになる為育児参加との関連がみられたのではないかと考えられる。但し, 重回帰分析の結果は, 全体に説明率が充分高いとはいえず, 以上のような要因のみでは育児参加を全て説明しきれないと考えられる。本研究では, 父親が親役割を肯定的に捉えにくい理由にまでは踏み込むことはできなかったが, この点について明らかにする為, 今後は, 親役割や仕事役割への意味付けを含めた上で, 仕事を持つ親が何を基準に複数の役割に優先順位をつけているのかに焦点を当てた, 多重役割の研究を行う必要があると考えられる。

4. 参考文献

- Belsky, J. & Kelly, J. 1994 The transition to parenthood 安次嶺佳子(訳) 1995 子どもをもつ夫婦に何が起るか 草思社.
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観: 父親の育児参加との関連 発達心理学研究, 10, 189-198.
- 鹿嶋 敬 1993 男の座標軸: 企業社会から家庭・社会へ. 東京: 岩波書店
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.

- 柏木恵子 1998 社会変動と家族発達 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房 pp.5-52.
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 柏木恵子 2001 発達心理学からみた母性・父性 根ヶ山光一(編著) 母性と父性の人間科学 コロナ社 pp.135-159.
- 柏木恵子 2003 家族心理学：社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会.
- 加藤邦子 1992 父親の性役割意識と父子かわりの関連について 家庭教育研究所紀要, 14, 117-123.
- 数井みゆき・中野由美子・土谷みち子・加藤邦子・綿引伴子 1996 子どもとのかかわり, 父母比較 牧野カツコ他(編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 pp.98-106.
- 小泉智恵 1998 職業生活と家族生活 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房 pp.186-232.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(編) 2004 平成15年度版働く女性の実情.
- 内閣府 2002 国民生活白書(平成13年度版) ぎょうせい.
- 内閣府 2003 国民生活白書(平成15年度版) ぎょうせい.
- 中野由美子 1992a 3歳児の発達と父子関係 家庭教育研究所紀要, 14, 124-129.
- 中野由美子 1992b 3歳児の母子分離と父子関係 家庭教育研究所紀要, 14, 130-134.
- 大日向雅美 1994 母性意識尺度(母親役割の受容に対する意識) 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 人間と社会を測る心理尺度ファイル 垣内出版 pp.375-379.
- 総務庁青少年対策本部(編) 1996 子どもと家族に関する国際比較調査報告書 大蔵省印刷局
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール (SESRA ; the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes) 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 人間と社会を測る心理尺度ファイル 垣内出版 pp.43-47.
- 土谷みち子 2000 父親の育児参加と新たな悩み 日本の子どもを守る会(編) 子ども白書・2000年版 草土文化 pp.148-149.